《質問》高橋さんの場合と佐沢さんの場合、高校にもし情報保障という整備ができるとした時どのように対応するつもりだったのか。そのあたり、聾学校との違いで言語習得の努力をどう考えるのか。
ーーーーーーーーーー
《返信》＜高橋真里＞
質問に答える前に、用語の確認をします。
情報保障→日本語の文字通訳
言語習得→日本語リテラシーの習得

１）高校にもし情報保障という整備ができるとした時どのように対応するつもりだったのか。
↓
　この質問にある「対応」という言葉には、情報保障を受けない選択肢も含めて、主体的に選ぶ文脈があります。
　当時、聾学校も含め、文字通訳も手話通訳もないのが当たり前の時代でした。私はそれを疑問にも思っていませんでした。「強いられた主体性」をもって、文字通訳も、手話通訳もない高校生活を「生き延びる」ことで精一杯でした。

　この質問の仮定には、
「もし、～ならば」→「どのように対応することができたか」
「もし、～ならば」→「どのように対応するべきだったか」
というような思考を感じます。
　この無邪気な質問には、私はとても回答できません。この取ってつけたような仮定を考えることは、情報保障の概念さえ無い世界の只中にいた私自身を切り離して無視することであり、私の口（もちろん比喩的表現）の中に嘘をぶちこむこ

とだからです。

２）そのあたり、聾学校との違いで言語習得の努力をどう考えるのか。
↓
　私は日本語リテラシーを、きたくまノートを書くぐらいには「習得」しました。私はこれまでに、私の文章力を聾学校教育の成功例のように、扱われたことがあります。
　しかし、それには座りの悪さを感じています。私はただ本の世界に浸かっていただけなのですから。当時の私は、日本語を聾学校の外の世界で「成功」するための手段とは思っていませんでした。日本語習得の努力のために本を「利用」しようとも思っていませんでした。
　聾学校は、日本語を学ぶだけの場ではありません。
聾学校は、その子がいる聞こえない世界を無条件に受け止め、子ども自身の自己肯定感を高め、子どもらしく過ごせる場であるべきと、私は考えます。それは、聾学校に限らず子どもが過ごす学校全てに当てはまることだと思っています。

日本語習得の「努力」を子どもに、強圧的に、求めないこと
日本語習得の「成果主義」だけで、子どもを評価しないことを、聾学校卒業生の一人として切に願います。
（文責：高橋真里）
ーーーーーーーーーー
《返信》＜佐沢静枝＞
　質問者は、「もし、高校時点で情報保障があったとしたら、どうしたかったか」、そして、「『言語習得→日本語の習得』の努力についてどう考えるか」、ということを尋ねた

かったのではないか、と想定して回答します。

　私は、当時（高校時）には「情報保障」という言葉を知らなかったのですが、もし、一部の大学でやられているような情報保障が可能であることを知ったとしたら、《体育や音楽やディスカッション的な科目は手話通訳を依頼》、《その他の科目は文字情報を希望》すると思います。

　私は小学５年から先生に薦められ、幼馴染と共に地元高校を目指したのですが、もし、当時であっても、手話の環境や文字情報が充実している聾学校が存在していたのなら、迷わず聾学校を選択したと思います。
　なぜなら、インテグレーションでは、偶発的な学習の機会が極めて乏しく、いろいろなタイミングで提案される様々な企画に、主体的に取り組む事は極めて難しく、多くの場合は結果のみを先ず知らされて、その経過は後から知らざるを得ない立場に置かれてしまうからです。
　物事が進展する際の、その時々に必要となる相談や意見表明、そこで巻き起こる議論、先生同士や他の生徒たちの会話からの偶発的な学習の機会を少しでも増やすためにも共有可能な言語環境が不可欠だと思います。

　「言語習得の努力をどう考えるか」については、もし仮に、地元の高校に入った場合でも、手話と日本語の両方がバランスよく活用できる機会が必要だと考えます。「言語習得」を「日本語のみの習得」と読み替えてしまうと、結局は、聴者のマジョリティに合わせていく生き方を生涯にわたって続けざるを得ない状況になります。そしてそれは、自分

だけでなく、次に続くであろう聞こえない人にも同じ状況を請け負わせることになります。

　地元の高校へ行っても、現在、一部の大学で行われているような「手話でプレゼンができる力を育成」し、通訳を通して社会に発信していく力を育成できる環境があればよいのですが、それは現実になっていません。アイデンティティ確立（自分を肯定的に示す）の為にも手話は必須であり、一人一人の人権が保障され、暮らしやすい社会構築の為に一人一人にできる事は何か、それを聾学校という教育現場で早くから育てていく事がとても大事だと私は思っています。

（文責：佐沢静枝）